

ケアレスということ

1 <ミス犯しやすい人間を・・・排除する> ことと<ミスは犯すものという前提で・・・日常的な業務の中でどのようにしたらケアレスミスを減らすことが出来るかということ>を絶えず追求> (3168 M 氏) することは互いに排他的ではなく併存します。したがって『人生ここぞという時にケアレスミスを犯すようでは所詮だめなのだ』とそういう人材を排除していくシステムが良いのか、それとも、『ケアレスミスに対して寛容な姿勢を保ちつつも、その原因を絶えずモニターして、意識を高めながらなくす努力をする』システムとどちらが良いことになるのでしょうか> (3168 M 氏) という二者択一の設問は生まれません。何事にも程度がありますが、ケアレスミスにも程度・レベルがあります。ミスはしてしまうけれど、誰でも同じレベルのミスをするわけではないと、先回にも申しました。問題は、組織的防止システムの対象として設定するミスのレベルです。現実想定するミスのレベルです。すべてのミスを漫然と認めてすべてを防止することなどあり得ることではありません。

2 <ケアレスミスをする性格> (強調されている主語) が<大発見を生む> 分野 (3182 I 氏) においても、ミスしない性格は大発見を生まない、事はないと思います。わたしは言い換えます、「ケアレスミスをする性格」でも「大発見を生む」場合もある。また<「長考できる性格」が多少のミスや「ケアレスミス」を犯すことを何とも思っていない (3182 I 氏)> とは、わたしは途方に暮れます。ミスして何でもないのは、ミスが何も自分に衝撃・実害をもたらさなかったからに過ぎないでしょう。電話番号の覚え違いや掛け違い「程度」のミスについて言っているのではありません (その程度のミスの有無ならば大発見を生むかどうかの大仰な違いの表現にはならないでしょう)。<すぐに答えを求める性格、答えが解らなきゃいられない性格ではなく、解らなくても平気でいられるような性格> (3182 I 氏) は「長考できる性格」と同義ではありません。答えらしきものに飛びついて済ませてしまう性格は軽薄なだけ (思慮が足りない)、不安におびえてそ何でも縋り付く性格か、でしょう。今すぐには得られない答えを求めながら緊張した現実の中で行動しつづけられる性格は、絶えずミスを避ける注意を払います。さもなくば、遠いところにある答えに行き着きません。なお、これは性格でなくて、心性・精神の範疇に属する人間の性質と思います。繰り返しになりますが、<実生活がミスだらけでも、天才科学者になる生徒がいるかもしれません> (3136 F 氏) が、今のところわたしの実検分のなかにいませんので、想像の域を出ません。いるかもしれないし、居ないかもしれません。ですけど、かもしれない話は際限がありません。肝要なことは、自分はどちらの足場で次に行動するかです。天才がいる、として自分は次の行動する (自分の負担・エネルギー

ギー・リスクを覚悟すると同時に他人の負担・エネルギー・リスクにも配慮する)か、いない、として行動するか、です。ガンかもしれない、と際限もなくガン捜しをして生活が破綻させるのは愚かです。私が知る数学物理医学の歴史の中で語られている人物史には、実生活ミスの側面が語られているものもあります。成果があった人物だから、そういう過去の「エピソード」が面白がって伝えられたのではないかとも思います。中学生の読み物ならいざ知らず、現実を経験してくると、実際にケアレスミスばかりしては、実験さへ滞りなく進まないではないか、意想奔逸の思いつきなら幾らでも出来ようが実証的に結論できないではないか、自分のものだけではなく他人のもの(生活・時間・金・税金など)を投入するに値する結論・予測に到達できるのだろうか、と思うのです。(中世近代の貴族や特殊階級ではなく今日の)「実生活がミスだらけ」の人の集合と実生活にミスが少ない人の集合を比べて、前者にだけ「天才科学者」がいるとはとうてい思えません。後者の方に多くはないでしょうか。人には身体機能の差があり、知能の差があり、性格の違いがあり、心性・精神の違いがあります。これらは範疇が違うので、同一人が同時に備えています。＜様々な状況下(容易か困難か?)での思慮の問題＞(3186 M氏)は心性・精神の違いの表現だと思います。

3 入試のケアレスミスに見られるような人間行為のダイナミズムはく『十円玉を一回投げてみたら表が出た。だからこれは表が出やすい十円玉だ』とするような誤った解釈＞(3181 Ma氏)のように、平板な推計学的真理(説明的ではない)の適用例ではありません。真理にはそれが適応する範囲というものがあります。馬鹿げたことを例に挙げれば、ガラスの破片を口に入れた自分の子どもに今後どうするかです。同じく、＜「ケアレスミスをしない性格」が重要な分野の「適性を大学入試の一発ペーパーテストで測れるのか?」＞(3182 I氏)を1回だけの度数で推計学的にだけ処理すれば、確度は低いことは言わずもがなです。推計学だけで扱うべき問題ではないと考えます。結局のところ、長い人生の中で入試のケアレスミスの位置づけが問題となろうかと、思います。『人生ここぞという時にケアレスミス』するのは、人生ここぞと思ったから狼狽したのか注意が狭くなったのか、人生ここぞとも思ってなくて関心がほかにあったからなのか、それとも何事もいいかげんなのか、ほかには?

4 <精神的に未熟なものでも大学で勉強する資格がある>とお考えのような(3136 F氏)に反して、わたしは資格がない方に足場を持ちます。人生ここぞというときに狼狽えたり、いいかげんだったりする心性を変える大学教育カリキュラム(講義と実習の)が有り得るか(だいたいカリキュラムで人間は変わりはない)、

変えるカリスマが自分にあるか、を考えなければならないと思います。入学時の心性を持ったままの卒業生を引き受けるのは大学ではありません。入試でミスした学生のミスの救済をはかろうとのお考えの理由が＜学生のミスが大学の迷惑になるものではないのですから＞（3136 F氏）であるとは、わたしには理解が及びません。

5 一般的に言って、幼少年から青年期に失敗の自己責任も引き受けずに肝腎要めのできごとが済んでしまうことは人間の成長にとって大きな糧となる経験の機会を奪うに等しいと考えます。資格がないとわたしが考える受験生は実はこれまでも機会を奪われつづけてきて入試を迎えたのではないかと推測します。前回申したように、積み重ねた経験がないと思うのです。入試の失敗はいわば最後の砦、この失敗は引き受けさせないといけなうと考えます。これを見送れば卒後に試練が来ますが、このときのミスの標的（もはや自分ではなくて他人）をいったい誰に引き受ける覚悟をしてもらったらよいでしょう。＜誰でも入試で落ちて捲土重来すればミスしない人間になれる＞とは、わたしも（3136 F氏）と同じく信じませんし、＜ミスは努力不足＞とわたしも（3136 F氏）と同じく毛頭思えません。努力によるのでは経験の積み重ねによって養われるという意を申しました。

6 今日＜大学入試で基本的には将来の専門分野への適性＞の判断を行う（3185 I氏）どころか、高校ですでに理系文系とって進路を分けています。わたしはこれに賛成しかねます。以前に申したように18歳が自信を持って進路を決められるはずはなく、ましてや自己の「適性」などはおとなでさへ堅固に納得している人は少ないでしょう。適性を判断するというわけではなく、広く学びながら進路の「腹を決める」時間が要ります。＜学部教育は大学院レベルで初めて専門教育を受けるための準備機関である＞（3185 I氏）という意味において、その時間の長短と呼称はさしおくとして、今日体制のなかで兎も角も理学部工学部などを細分せずに入學させ、教養部を残した東大の行き方を支持します。望ましくは高校の文理二分からして改めたい。その意味において、かつてわたしは医学部進学において今日の高校の生物履修は不急と主張しました。ところで、たとえ時間が与えられても、広く学ぶ最中にケアレスミスを生ずるようでは正しく学ぶことさへ怪しくなります。進路の腹を決め、自己の適性（妄想でなければまたとなく結構）までも見定めるためには、本気で学ぶことが必須だと思います。その学生はいざというときにミスしたりしません。いざという入試に一つ間違えば誤答の連鎖が起こる問題のケアレスミス（繰り返しますが、なぜそんな大問題に不注意だったのか？）を免除されたまま先へ進んで、進路決定の重大場でケアレスでない進路を決められる心性に突然成りかわろうとは思えません。

7 それでも、若者に資格の有無を問わずに機会だけはもうけたい、と考えて、入試

全廃でどこへでも入学可能としたら、高校までの教育にどのような意義を与えるのでしょうか。そのうえ、入学後にふり分けられればよいとしたときの現実、毎年変わる入学者数に教官数、講義室数、実験設備など、いかなる対応が可能かは想像しようもありません。だからインターネットで個々の大学卒を取り外した講義教育を進めると言っても、そこでは知識の伝授だけが可能だが、人間同士の感化という極めて大きな力が欠落して、それこそ「人間教育の場」には足りません。もちろん感化は悪しき方向にもありますから、いっそインターネット教育にした方がましと思う施設や人もあります。1960年代のブエノスアイレスでは、実際に医学校にだれでも入学できました（在米時代にアルゼンチンの友人から聞いたことです）。買い物袋をぶら下げたおばさんが隣にいるくらいに講義室は人であふれて教官の話もきこえない、実習などは成り立たなかったそうです。卒業時にはほとんど全部がいなくなった。かの国の現状は知りませんが。

8 日本の医師のレベルがアメリカの下であるのは事実です。だが、医療となると医師のレベルに直接するばかりではありません。一切合切く医療分野が壊滅的に遅れている>（3185 I氏）わけではなく、国民皆保険は世界に冠たるものです（働きもしないし税金さへ納めもしない者を容認する人には。容認しない人には最悪）。<非常に「官僚的傾向が強い」>（3185 I氏）のは、医師を含めた日本の大学卒業者ではない人々（高卒事務員も看護婦も店員も）にもある傾向なので、<日本型一発入試の弊害>（3185 I氏）とは言えません。日本の傾向です。このフォーラムでも、自分の現実の責任実行経験にどれだけ基づいたご意見か、うっすら心配になることがあります（常時何人何年間延べ何人の同僚・部下と日夜をともにしたご経験なのか、独居自営業者ならそんな経験は皆無に近いのではないかと、実習の学生（ましてや研修生なら対社会的）をいったい何人まともにさせたか（一人だけなら1回のコインの表と同じで学生の資質によったかもしれない）、子育てにご自分の考えを主張されてもその実験の結果はまだご覧になっていないのではないかと、自分がいなくなったら伝えたい考えまでもこの世から消えてしまうような切迫した危険と妻子を食べさせ学校に通わせる生活とのバランスを測る危うさの日常なのだろうか・・・わたしは小中高教員の匿名をよく理解できます・・・わたしには教員にはない職業上一人でも立てる裁量があります、など）。そしてフォーラムをご覧の万の数の無言の方たちが、ご自分の経験と日常に照らし合わせながら建設的に批判しながら見ておられるか、もしかしたらただ字面を追って官僚的に見ておられはしないか、などといったずらな杞憂をするのです。

この8項は蛇足でした。長文のついでにリアリストの独り言をつけ加えれば、ほ

んものの冒険者は格好よく颯爽としてはいません。必ず目標に到達するために、一步一步臆病なくらい慎重で、最果ての不可能の一步手間にある現実に可能な領域に、腹を決めてはっきりと、しかしひそかに踏み出します。これは性格でなく精神人格の性質です。冒険は、作業員であれリーダーであれ、その精神資質については同じものです。長々と失礼いたしました。 （高等教育フォーラム 2001年06月27日）